EU包装規則、イタリアのワイナリーに数年前のボトルやコルクの追跡を迫る

長期熟成ワインの生産者は、数年前に買った包装材の文書化が、2026年8月の適用開始前に適合リスクを高めかねないと警告している。

2026年9月30日（水）



長期熟成ワインを手がけるイタリアのワイナリーは、欧州連合（EU）の包装および包装廃棄物規則の下で新たな課題に直面している。新ルールは、何年も前に購入した可能性のあるボトル、コルク、ラベル、その他の構成部材にまで、文書化とトレーサビリティの義務を広げるためだ。

Unione Italiana Viniによれば、この問題がいっそう切迫しているのは、包装および包装廃棄物に関するEU規則PPWRが2026年8月12日から原則として適用されるためだ。同団体は、この措置が、食品接触包装におけるパーフルオロアルキル化合物およびポリフルオロアルキル化合物（PFAS）の制限、特定の重金属の上限、適合性文書の要件など、ワインのサプライチェーンに影響する義務を導入するとしている。

ワイナリーにとっての実務上の問題は、将来の購入だけではない。何年もセラーに置かれてから出荷されるワインにすでに使われた包装材の特性や由来を、どう再構築するかも課題だ。そこには、旧来の商取引条件のもとで購入したボトル、栓、ラベル、外装包装が含まれ、供給元がその後に製品、社内システム、所有権を変更している場合もある。

この問題は、Unione Italiana Viniの業界紙であるIl Corriere Vinicoloが水曜日に掲載した報道で取り上げられた。同紙によると、ワイナリーは欧州の規則の下で現在求められている文書を整えるため、供給業者から宣言書や技術情報を収集する必要がある場合がある。特に長期熟成向けワインでは、包装資材の調達から市場投入までの時間差が大きくなりうるため、負担は重いと指摘した。

このタイミングは、ワインに限らず飲料業界全体にとって重要だ。新たな包装規則が発効すると、長い生産サイクルを持つ製品では適合対応が難しくなりうるためである。ワイン、そして場合によっては長期保管や熟成の後に販売される他の飲料でも、生産者は当初の購入から長い時間が経った後に、古い包装記録や供給業者の認証を管理しなければならない可能性がある。記録が不完全であれば、追加の事務作業や適合リスクが生じかねない。

新しい枠組みは、製造者と供給業者の双方に未解決の論点を突きつけているようだ。Unione Italiana Viniによれば、ワイナリーは、供給業者との関係、トレーサビリティツール、製品仕様が時間とともに変わっている可能性がある中で、各包装部材について信頼できる証明をどう入手するかを理解しようとしている。同紙はまた、ボトルの重量、環境ラベル、包装内の空隙を減らすことを目的とした規則に関する未解決の問題も指摘した。

懸念は、ガラスや食品に直接接触する素材に限られない。同じ紙面でIl Corriere Vinicoloは、イタリアの段ボール箱メーカー協会、Associazione Italiana Scatolificiのアンドレア・メカロッツィ会長のコメントも掲載した。同氏は、段ボールはすでに回収と再生繊維の使用で高い成果を示している一方、新たな手続きは供給業者の文書作業を増やすと警告した。

この追加の事務負担はサプライチェーン全体に及ぶ可能性がある。包装メーカーが、規則のマイクロ企業向け規定の対象となる小規模事業者を含め、ワイナリーの顧客により詳細な情報を提供するよう求められるかもしれないからだ。メカロッツィ氏は、バッチのトレーサビリティをなお明確化が必要な点の一つに挙げた。また、包装ファミリーごとの宣言書を簡素化する可能性にも触れ、規制当局が認めれば反復的な事務作業を減らせる変更になりうるとした。

出典は、最終指針がそれらの点を解決したとは示していない。むしろ、生産者と包装供給業者が、記録保持の負担がどこまで広がるのか、また既に使用中の在庫にどこまで及ぶのかをまだ理解しようとしている規制移行局面だと説明した。長期熟成ワインを手がけるワイナリーにとっては、この不透明さは特に重要だ。規則が原則として適用される日をはるかに過ぎても、在庫がセラーに残り続ける可能性があるためである。

イタリアのワイン業界は今、実施の第一段階に備えている。Unione Italiana Viniによれば、同団体とANFORMAPEは、UIV会員向けのウェビナーで初期の適合義務を検討する予定で、開催は10月5日月曜日の午前11時から12時30分まで。イベントは、新ルールの下で企業が取るべき初期対応に焦点を当てる見込みだ。

この議論は、欧州の包装政策におけるより広い緊張関係を映し出している。規制当局は健康、環境、

トレーサビリティの基準を強化しようとしている一方、生産者は、供給網が分断され製品サイクルが長いと、適合対応が複雑になりうると警告している。ワインでは、ボトルが充填されてから販売まで何年も保管されることがあるため、包装文書はもはや購入上の問題にとどまらない。長期在庫管理と法令順守の一部になりうる。

イタリアのワイナリーにとって、当面の作業は理論より実務になる可能性が高い。すでに使用中の包装について記録があるか確認し、新基準を満たす宣言書を供給業者に求め、セラーで熟成されたワインが市場に出る前に、欠落部分を特定することだ。ボトル、栓、ラベル、カートンの供給業者にとっては、顧客へのより詳細な回答や、ロットと資材を追跡するためのより体系的な仕組みが求められるかもしれない。

規則の適用が始まるにつれ、業界は、文書、ロットのトレーサビリティ、簡略化された宣言書について当局がさらに明確化を示すか注視している。それまでは、長期熟成ワインを手がけるワイナリーが、新規則が突きつける最も難しい問いに直面しているようだ。過去に調達した包装部材について、今日の要件を前提に設計されていない仕組みの下で、どう適合を証明するのか、という問いである。